

みんなと一緒に勉強したかった。

彼と初めて会ったのは、今から\*\*年も前の夏でした。当時小学校4年生の彼は、問題が解けないでいる友達には、自分も必死に考え答えをだしては（解けないでよく私の処に聞きに来たが）、懸命になって教えたり、キャンプではごく自然に小さい子や女の子の荷物を持ってやったり、・・・そんな心優しい子だった。小学校では陸上競技に夢中になっていて、毎日放課後遅くまで練習をしていたわんぱく坊主であった。そんな彼も、時には当時学生だった私の下宿に勉強しに来ることもあった。そんな時は、二人で夜道を自転車を引きながら帰り、色々な話をしたが、勿論彼の話は陸上の話ばかりだった。今日50メートル走で何秒出したとか、今日はこんな練習をしたんだとか・・・。

それから、6年の月日が流れた12月のある日、私は知人から一本の電話頂いた。彼が少年鑑別所に送られ、ご両親が大変な思いをなさっているとのこと。あの彼が・・・。私は仕事のついでに時々彼の家を尋ねたが、お留守でお会いできなかった。日曜日ならばと思い、その週の日曜日の夕方、家族を連れて、「近くに遊びに来たので。」と、彼の家を尋ねた。幸いにご両親がいらして、久しぶりの再会に話が弾んだ。しかし、当然のように彼の話になり、ご両親の言葉が沈んできた。彼は自宅監察になってるにも拘わらず、友達の家は何日か泊まっては家に帰り、また着替えを持って家を出る状態だ、と言う。ご両親からクリスマスパーティの招待を受け、彼の家を後にした。

数日後、彼のお母さんからお電話を頂いた。私達が訪れた翌日、彼が家に帰って来て私達の訪問を聞き、懐かしがっていたと言う。6年前の、やはりクリスマスイブを私と彼の家族と一緒に過ごした思い出が、まだ彼の心の底に残っているらしい。クリスマスの日には必ず帰ってくると言って、また家を出ていった、とのことだった。沢山の料理を前にしてはしゃぎ回り、小学4年生なのに、アルコールの入ったシャンペンで舌でちょっぴり味見した彼。6年前のクリスマスパーティの光景が鮮明に思い出された。

クリスマスパーティには、一歳になったばかりの私の息子と妻と三人でお邪魔した。彼のご両親とお姉さんの出迎えを受けた。彼の姿はなかった。先程彼から少ししたら帰るとの電話があったと言う。彼も私の訪問を楽しみにしており、あれから2,3回電話で私に来ることを確認したらしい。一時間ほどして彼が家に帰ってきた。

「いらっしやい。久しぶりです。」意外な彼の言葉だった。と同時に、そう感じた自分を恥じた。私も既に彼にレッテルを貼って見てしまっていた。「やあ、久しぶり。どうしてる？」私と彼は、彼の部屋で暫く話しをした。何気ない話ししか私はできなかった。髪を部分的に脱色し、まゆを剃り、とても15,6歳の少年とは見えなかった。

程なくして彼のお母さんに呼ばれ、料理の並んだ居間に通された。私の息子は彼のお父さんに抱かれてお菓子を頂いており、妻と彼のお姉さんは彼女の友達を挟んで楽しそうに話していた。温かい家庭である。お互いにクリスマスプレゼントを交換し会った。彼は私の息子に熊のぬいぐるみをプレゼントしてくれた。息子はとても喜んで、彼にまわりつ

いた。彼は私の昔のニックネームを忘れてはいなかった。優しい心も昔のままだった。街で私の息子へのプレゼントを探し回って、帰りが遅くなってしまったとのこと。お姉さんの友達のギターに合わせて歌を歌い、本当に楽しいクリスマスイブだった。目に涙を浮かべた彼のお母さん笑顔と、私の息子を抱き上げた彼の笑顔は、今でも私の目に焼き付いている。こんな明るく、暖かな家庭なのに、なぜ彼は、……。私には信じられなかった。彼に、大晦日私の家に泊まりに来るように言って、彼の家をお暇した。私達の車が出て見えなくなるまで、彼と彼のご家族に見送って頂いた。私の息子も、後部座席に後ろ向きに立って、手を振って答えていた。

数日後の30日、彼は私の家に泊まりに来た。出迎えた私の家族に、「お邪魔します。」と礼儀正しく挨拶した。一緒に夕食を済ませ、テレビを見ながら色々な話をした。彼が小学校4,5年生の時の話や、その後の私の話など。「先生が結婚をして、子供がいるなんて。それに、家を建てたなんて。」と、彼は言う。「俺だって、年が来れば結婚するさ。おまえも小学校4年生の時はこんなに小さかったのになあ。」彼は終始私のことを、昔のように「先生」と言う。次第にくつろいで言葉遣いが5,6年前の彼になってきた。私の家族は先に失礼して床に入った。その後、二人で大晦日の午前3時頃まで話し続けた。

私は彼に、「どうしてこんなことになってしまったんだ？」と聞いた。「それが、……」と、彼はここ数年の自分の事を語り始めた。前述の通り、小学生の彼は年下の子や女の子にはとても優しくだったが、年上の子には少し生意気な言葉をはくことがあった。その彼が中学1年生の終わり頃、前の授業が長引き、次が体育の授業のため、皆急いで着替えをして運動場に集合した。ところが、2,3人の女生徒が間に合わず遅れてきたところを、いきなり先生が理由も聞かずに、その生徒を殴った、と彼は言う。目の前でそれを見た彼は、カッとなり先生に、「どうして理由を聞かずに殴るんだ！」と言い寄ったが、先生に、「おまえには関係ないことだ。」と言われ、益々頭にきたんだ、と彼は話し続けた。私にはその話の真偽は分からない。彼の話ばかりを信じるのではないが、少なくとも彼のとった行動には、彼の性格が表れていた。気持ちがおさまらない彼はその後、先生の車にいたずらをしてしまい、学校で彼のことが問題となり、彼の反発と周りの目が悪循環をもたらし、いくところまでいってしまったようである。

話し終えて彼は、「でも、自分も悪かったんだ。」と漏らした。「勉強の方は、どうだったんだ？」と言う私の言葉に、彼は、「全然分かんなくなってしまうと、学校がつまなくなってしまうんだ。」と答えた。「でも、俺もさあ、本当はみんなと一緒に勉強したかった。」

朝7時頃、彼の寝ている部屋から明かりが漏れていた。そっと覗くと、彼は既に起きていて、着替えも済ませていた。布団もきちんと畳んであった。「ゆっくり休んでいればいいのに。すこし散歩にでも行こうか。」彼と私は息子を連れて、近くを散歩した。大晦日の朝である。今日一日で今年が終わる。明日からは新たな年が始まる。私の息子をあやす彼。実に気持ちのいい朝だった。

その後、彼のお母さんから時々お手紙を頂いた。2年位経ったある日、彼の家に電話をした。夜勤明けとのことで眠そうな声で彼が出た。元気で働いているようだった。

#### 追記

もう確か\*\*歳になっているだろう、彼。プライベートな部分もありますので、話の要旨は替えず、一部修正させて頂きました。私は、ただ話を聞いてあげることしかできませんでした。何かをしたのではありません。いや、逆に、「ばっかだなあ、おまえ。そんなことして何になるんだ！」と、大人げなく夜中叫んでしまった私です。しかし、そう言われて頷いた彼。芽生えた正義感と上から押しえられることへの反発、あるいは、自分の行動を自制し切れない弱さに気付きながら、自立に必死にもがく子ども達。そんな子ども達に、自分をしっかり見つめ、肩肘を張らず、もっと自分に素直に生きてほしいと願うばかりです。

1985年11月記. 2003年3月一部修正.